サタンの反逆 ：大艱難への序章

第 2 部　創世記の空白期（ギャップ）

ロバート・D・ルギンビル博士
http://ichthys.com

I. 創世記の空白期（ギャップ）を示す言語的証拠
II. 創世記 1 章における裁きの文脈
　1. 創世記 1 章 2 節における地球の描写
　2. 闇
　3. 海
　4. 聖霊の抑制する働き
　5. サタンの反乱のタイミング
III. 創造と再創造
　1. 天地創造の七日間
　2. 創世記 2 章 4 節の要約
　3. サタンに対する神様の答え

他のすべてに先んじ、神は天と地とを創造された。　創世記 1 章 1 節

はじめに：

　サタンは、神さまが天使たちから受けている栄光と称賛を見て欲望を起こし、宇宙を支配する神の地位を乗っ取るべく、完璧なクーデターを考え出し、実行に移しました（**第 1 部：サタンの反乱と堕落**を参照）。しかし、そうした裏切りに対して神は何もできないだろうし、また対処することもないだろうというサタンの想定は外れました： 神はご自身の聖なる威厳を損なうことなく、ご自身の完全な義の規範に従って、私たちのいわゆる「時間」の枠の中で、ご自身の宇宙を完全に回復させ、完結に至らせることができましたし、実際にそうされました。 サタンは自分が巧妙に計画した反乱に対して、神がうまく対応できるとは思っていませんでした。悪人がよくするように、悪魔とその従者たちは、主は彼らの悪を容認せざるを得ないのだと思い込んでいました（ヨブ 22 章 13-17 節、詩篇 10 篇 11-14 節; 59 篇 7 節; 73 篇 11 節； 94 篇 3-7 節、イザヤ 29 章 15 節、エゼキエル 9 章 9 節、ゼパニア 1 章 12 節参照）。人はよく、罪を相対的な物差しで測って、こんな言い訳をします。「誰もが完全ではないのだから、神は他のすべての人を

裁かずに私だけを裁くことはできない」（救いに関する命題「福音を聞いていない人もいるだろうから、私がキリストを信じなくても神は私を責めることはできない」）。しかし、その知恵と巧妙さにもかかわらず、サタンとその天使たちの身には詩篇に記されていることがふりかかります。

彼ら[邪悪な者]は悪い企てを固くたもち、共にはかり、ひそかにわなをかけて言う、「だれがわれらを見破ることができるか。 だれがわれらの罪をたずね出すことができるか。われらは巧みに、はかりごとを考えめぐらしたのだ」と。人の内なる思いと心とは深い。 しかし神は矢をもって彼らを射られる。彼らはにわかに傷をうけるであろう。(詩篇 64 篇 5-7 節)

神はクーデターに対してその御力を表して、対処することもできたにもかかわらず、その計りがたい知恵によって、悪魔の想定を超えたやり方で動かれました。神がサタンを撃つために選ばれた手段は人間（究極的には人の子であられる主イエス・キリストという人物）であり、神が悪魔を低くするために選んだ枠組みは、人間の歴史を通して働きかけることでした（この原理については、本シリーズの第 1 部、第 3 部、第 5 部で詳しく説明しています）。したがって、神のなされる対処は、容赦ないものでありながら、完全に公正なもので、人類が創造される前から継続しているものです。主にとっては時間の経過は問題とはなりません。（詩篇 90 篇 2-4 節）

神は、その神性と完全なご性格の内に、わざわざご自身の正当性を立証するために慌てる必要もありません（被造物である私たち持っている時間感覚とは異なります）。サタンが堕落して仲間の大勢の天使らをうまくそそのかした後に起こったことは、アダムとエバが堕落した後の出来事に類似しているようです。アダムとエバの場合と同様に、（違反の罰として言われていた）即時の裁きと死は、予期した形ではすぐには起こらず、肉体的な死はしばらく後に起こることになりましたが、神の恵みからの分離という**霊的**な死は即座に起こりました。同様に、サタンとその従者たちに判決が下されても（「悪魔とその使い＜天使達-欽定訳＞たちとのために用意された」火の池：マタイ 25 章 41 節参照）、その判決の最終的な執行はまだ行われていません。アダムとエバがエデンから追い出されたように、神はサタンを原初のパラダイスから追い出し、初期の地球に大きな裁きを下し、全宇宙は闇に突入しました（下記 II.2 項参照）。

サタンのクーデターが起こってから、神がその原始の世界を裁くまでの期間について、聖書には言及も記録もありませんが、人間の時間感覚によるなら相当の長い期間であった可能性があります。悪魔は、元々の楽園である原初の「エデン」（第 1 部参照）の地上における支配を始めましたが、このような猶予期間によって、神を選ぶのが誰なのか、誰がサタンを選ぶのかがはっきりとしてきたことでしょう。悪魔が肉体を欲しがり、

その欲求を満たすことがサタンの計画に不可欠な役割を果たしていたことを考えると（第 1 部参照）、私たちが現在所有している古い地球の魅力的な化石記録の多くは、悪魔がそのような目的のために元々の地球の動物相を操作し、悪用した結果であるとも考えられます。 聖書では、サタンが爬虫類（ドラゴン、蛇）と同一視されており、彼が爬虫類に魅了されていることから（創世記 3 章参照）、先史時代の恐ろしく強力な生物が、理論的にサタンに由来する可能性が考えられます。（以下のⅡ.3.f の項目を参照）

やがて地球は、主が創造した原初の楽園とは似ても似つかぬものとなりました。神は、サタンの成そうとしていたことがいかに不適切であり、サタンの約束がいかに空虚であるか、またサタンの支配がいかに専制的であるかを、すべての天使達が事の成り行きを見るなら、十分に明らかなものになるようにされたのです。そして、悪魔の「実験」に終止符を打ち、宇宙の明かりを消し、敵とその従者たちを、起こりつつあることへの不安に震え上がらせたのです。悪魔とその天使たちの邪悪で反抗的な意図が十分明らかになって、それ以上待つ意味がなくなったとき、全能の神は有史前の地球に厳かな裁きを下しました。その裁きが起こったのが、創世記 1 章 1 節と創世記 1 章 2 節の間の「空白期（ギャップ）」です。

その時代の世界に対する主の大規模な裁きは、サタンの誘惑を拒否した天使たちの忠実さを証明することにもなりました（続くセクションⅡを参照のこと）。彼らは、神の世界が永遠に闇と荒廃に覆われたまま放置されることはないと、神を信頼したのですが、果たしてそのとおりになりました。神の解決策は、サタンとその従者らには思いも及ばない、天と地の完全な再創造と、それに続く全く新しいもの、すなわち人間の創造だったのです：人間は、＜能力の＞制限があることは明らかですが、サタンのすべての中傷の嘘を暴くための神の手段であり、サタンとその悪霊どもが最も欲しがっていたもの、すなわち霊を宿す肉体を持っている被造物でした。

創世記 1 章 2 節以降で宇宙は一新されたにもかかわらず、現在の天と地はどうしようもないほど悪に染まっており、最終的には「義が宿る」新しい天と地に置き換えられるために火で焼かれることになります（ペテロ第二の手紙 3 章 5-13 節）。その時、すべての邪悪さ（またすべての邪悪な生き物）は、神の完全な新しい宇宙から永遠に取り除かれ、朽ちることのない完全で調和のとれた宇宙となります。その輝かしい未来は、物事は元々あった状態に似ていながら、さらに良い状態で悪の存在する余地のない状態になります。

サタンの反乱と堕落、当時の世界に対する神の裁き、サタンとその嘘を叱責し否定するための世界の再創造と人類の創造、そして悪魔と現世に対する神の最終的な裁きは、すべてキリスト教徒にとって非常に重要な課題です。

これらの事柄を理解していないと、時代を超えた主の計画の働き、ひいては私たちの地上における使命と目的のすべての意味をしっかりと把握することはできません。創世記 1 章 1 節と、それに続く七日間の再創造とが同一のことであると決めてかかることは、誤りであり、聖書が教えている非常に重要なことを理解しそこなうことになります。

I. 創世記の空白期を立証する言語学的側面からの考察

他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり…
創世記 1 章 1 節 ＜英本文直訳＞

チェーファー氏（Chafer）や他の人々の推察のように、創世記 1 章 1 節と 2 節以降の聖句の間には、文脈の中断、あるいは「空白期間（ギャップ）」があると解せます。[1] ヘブル語のベレシート bereshith(בראשית)は、よく「初めに」という訳が昔からなされていますが、この訳はやや誤解を招く傾向があります。[2] ヘブル語には、(ギリシャ語の en archei: ἐν ἀρχῇ というような)定冠詞「the」はありません。意味的に、取るに足らないことのように思えるかもしれませんが、従来のこの翻訳の問題点は、この一節が、すぐ**後に**続く文節に途切れなくつながっているような意味合いを感じさせてしまうことです。そのように解釈すると、創世記 1 章 1 節は、創造の七日間（とそれに続く物事の展開）の要約ということになり（のちに再構築されることになる世界の創造とは別の解釈の要約となり）、最初に神が宇宙を創造した事実が端的に述べられているというものではなくなります。 そうなると、創世記 1 章 1 節の意味合いとは異なったものになってしまいます。[3]

---

1 L.S.Chafer, Systematic Theology (Dallas 1948) v.2, p.39 et alibi; また、F.Delitzsch, A System of Biblical Psychology tr. R.E. Wells (rpr. Grand Rapids 1977) 71-77.

2 類似点(例えば、イザヤ 15 章 1-2 節)については、ゲゼニウスのヘブル語文法 para. 100.2a.

3 要約は、その性質上、文学的処理の始まりよりも終わりに適しています。創世記 2:4 はまさにそのような要約で、その時点までの創造（と再創造）全体を網羅しており、私たちが期待する場所、つまり七日間の記述の最後に現れています。不思議なことに、創世記 1:1 を「先行する」要約と考える人の多くは、創世記 2 章 4 節をさらに先行する要約であり、後続のものと結びつけて考える傾向があります。多くのバージョン（特に NIV）で作られたこれらの節のスクラムを説明するのに、他に方法はありません。

まず第一に、聖書の冒頭の文章は(どんな先入観も持たずに、書かれている言葉自体を検証してみると)、まさに私たちここで提示していること、すなわち物質的な宇宙に関する神の最初のアクション、すなわち最初の創造についての歴史的記述です。一方、＜創世記1章1節は、七日間の創造に関する＞要約が最初に記されたものだとすると、2 節に移るとすぐに、＜その解釈は＞問題に直面します。地球は「形もなく、空虚」(KJV)と表現されているからです。ですから、もし 1 節が天地創造の実際の記述ではなく、その後に記されている七日間全体の要約をまず伝えているものだとするなら、＜3節以降の＞創造に関する詳細な記述の中に、どうしてこの形のない「地」についての再記述がないのでしょうか？　形のない「地」はどこから発生したのでしょうか？　天地創造の**前に**何らかの形で存在していたとでもいうのでしょうか。それは、宇宙を超越した神と、その神のエクス・ニヒロ＜ラテン語 ex nihilo ゼロから/無から＞の創造を純粋に信じているすべての人にとって、かなり受け入れがたいものでしょう(後の第Ⅱ部を参照してください)。一方、もし地球が本当に「無から」創造されたのであれば、七日間の詳細な記述がされている中で、その＜「無から」の＞創造について言及していないのは奇妙極まりないことですし(もし本当に七日間が最初の創造を表していると仮定するのであれば)、その意味では1節にある地球の創造についての記述が単なる要約であると仮定するのは難しいことです。

創世記 1 章 1 節をそれ自体一つの出来事としてではなく、1節の後に描写されている出来事の要約とする際に生じてくる第二の問題点は、1 節と 2 節の文法的なつながりにあります。1 節の神の無からの天地創造の記述に続く 2 節の出だしは、前の節とのつながりが分離する表現になっています。接続詞「waw ヴァヴ」と名詞形(定形動詞ではなく)の組み合わせは、ヘブライ語では強い対比を示します。つまり、2 節の初めにある意味は「そして」ではなく「しかし」なのです。文法的に言えば、「**そして**地は ... 」(欽定訳英文)ではなく [4]、「**しかし**地は ... 」の方がより確かな根拠に基づく訳になります。この訳が、あくまでも実際の節の言葉の言っていることなので(それに反するあらゆる憶測にもかかわらず)、要約解釈を支持する人々にとって頭を悩ますものなのです。

しかし、神の御言葉を素直に受け入れようとする人々にとっては、聖書の最初の二つの節の間にある明確な空白期(ギャップ)、深い溝は、注意を喚起し、調査を促す紛れもない標識灯なのです。何か劇的な出来事があったからこそ、1 節と 2 節の間にこのようなはっきりとした描写のコントラストが生じているのは明らかです。つまり、創世記のギャップは、原語のヘブル語において、紛れもなく存在し、神による最初の完全な世界の創造と、その後のサタンの反乱によって破壊された世界の再創造との間の中断を物語るものです。

---

[4] Lambdin's Introduction to Biblical Hebrew (Cambridge 1971) para.参照。132. 類似性については Gesenius para.164.b.3、およびこれらの箇所を参照してください。Gen.14:4; Jdg.3:23 とその 24 節。

　他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり…
　創世記 1 章 1 節–2 節前半

論理的にも、文法的にも、また（下記に見るように）文脈からしても、主張されていることは明らかです：
　1 節では、神が無から世界を創造されたことが単純明快に述べられています。一方、2 節の分離節から始まる次の節では、サタンの反乱による状態が述べられています。その後、神は世界が再び生存可能なすみかとして再構築され、悪魔の反乱を疑いの余地なく否定して神に喜びをもたらしてくれる全く新しい種類の道徳的被造物、すなわち「御使いよりわずかに欠けのある」（詩篇 8 篇 5 節–新改訳Ⅳ）に人類を造られ、最終的には彼らが天使たちの上に立つ運命とされました 。[5]

II. 創世記第 1 章における裁きの文脈：

もし創世記 1 章 1-2 節の言葉が、最初の創造と再創造の七日間の間に空白期（ギャップ）があることを言っているのなら、神の言葉の最初の文に続く文脈から、それがわかるように思われます。創世記 1 章 1 節をそれ自体の出来事ではなく、要約として捉えることは、特にこの二つの節を文法的に正しい翻訳をすることは、文脈的に無理があります。

　他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり–やみが深淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。
創世記 1 章 1–2 節

1. 創世記 1 章 2 節における地球の描写： サタンが先史時代に支配していた地球の荒廃と破壊は、ヘブル語の「トフー・ワ・ボフー」（「荒廃し、廃墟と化した」：תהו ובהו）という言葉で適切に表現されています。この言葉の直訳による問題点を解決するために、多くの独創的な（そして誤解を招くような）翻訳が提供されてきました。というのも、明ら

5 天使に対する人間の最終的な地位については、本シリーズの第 1 部「サタンの反逆と堕落」を参照。と堕落をご覧ください。

かに荒廃した状態の地球が描写されているため、第 1 節を要約文とするなら、明らかに問題が生じてしまうからです。神は完全なものだけを創造されるので, 1 節と 2 節の間に空白期<創世記に記されていない期間・ギャップ>がないとすれば、地球はいつ、どのようにして荒廃するようになったのでしょうか。
「トフー」と「バフー」という言葉は、常に「空虚」「無駄」あるいは、「無価値」に関連するもので、混乱し混沌とした状態のことを言い、必然的に何らかの大災害の結果であり、通常は神の裁きによってもたらされたものです(参照:申命記 32 章 10 節; サムエル記上 12 章 21 節; ヨブ記 6 章 18 節, 12 章 24 節, 26 章 7 節; 詩篇 107 篇 40 節; イザヤ 40 章 17 節, 41 章 29 節, 44 章 9 節, 45 章 19 節, 49 章 4 節, 59 章 4 節参照)。

> 混乱せる(トフー)町は破られ、すべての家は閉ざされて、はいることができない。(イザヤ 24 章 10 節)
>
> …主はその上に茫漠(トフー)の測り縄を張り、空虚(ボフー)の重りを下げる。(イザヤ 34 章 11 節後半−新改訳Ⅳ)
>
> 破壊に次ぐに破壊があり、全地は荒され、わたしの天幕はにわかに破られ、わたしの幕はたちまち破られた。いつまでわたしは旗を見、またラッパの声を聞かなければならないのか。「わたしの民は愚かであって、わたしを知らない。彼らは愚鈍な子どもらで、悟ることがない。彼らは悪を行うのにさといけれども、善を行うことを知らない」。わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった(トフー・ワ・ボフー)。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた。(エレミヤ 4 章 20-26 節)

この最後の聖句は、イスラエルの地に対する神の裁きを記述しているものですが、創世記 1 章 2 節で荒廃した地球を表現している言葉と全く同じ言葉が用いられている点で、特に興味深いものです。このことから、エレミヤは創世記 1 章 2 節の記述を同じように理解していたに違いないことがわかります。(2 節の)地球は廃墟であり、神の裁きの結果として混沌となったという表現が、イスラエルの地に迫り来る主の裁きが解かれた後になるであろう状況の描写に使われているのです。

イザヤが「トフー」という言葉を以下の文脈に用いていることにも、留意して下さい。

なぜなら、創世記 1 章 1 節に記されている神による**原初の**地球の創造は、「トフー・ワ・ボフー」という言葉で表現されている様子とは真っ向から反しているからです。

> 天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、これを堅く立てた方、これを茫漠としたもの（トフー）として創造せず、住む所として形造った方…(イザヤ 45 章 18 節-新改訳Ⅳ)

上記の「創造」の言葉は、創世記 1 章 1 節で使われているのと同じ動詞の「バーラー」(arb)で、旧約聖書では主の奇跡的な創造行為を表すのに最もよく使われる言葉です。この箇所によると、神が最初に地球を創造した目的は、その有用な居住のためでした。もともと神は住むことのできない混沌を創られたと考えるのは、神が意図しておられることとはそぐわない話になってしまいます。実際のところ、ここで語られているのは、主は地球をトフー（混沌）として創造されたのではないということです。したがって、創世記 1 章 2 節のヘブル語の文法が示唆すること、すなわち、聖書の最初の二つの節の間に物語のギャップが存在し、そのギャップが不定形で不明確な時間のスパンを表すことを受け入れない限り、イザヤ 45 章 18 節と創世記 1 章 1 節を両立させることは不可能なのです。イザヤ 45 章 18 節は、創世記 1 章 2 節が天地創造の直後ではなく、（サタンの反抗に対する神の裁きによって破壊され荒廃した）後の地球を描写していることを理解して初めて意味をなします。

2. 闇の世界 ：

> 他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり–やみが深淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。
> 創世記 1 章 1–2 節

聖書の象徴として、闇（やみ）は良いものではありません。闇は悪の象徴です。地球が暗闇に覆われているという描写は、非常にネガティブなイメージを示すことを意味しています。つまり、**祝福**（創世記 1 章 1 節の素晴らしい原初のパラダイスにおいて想像できるようなもの：第一部参照）ではなく、それは**呪い**のイメージです。聖書の中で暗闇がどのように使われているかを見てみると、この点がよくわかります。

a. <u>悪の象徴としての暗闇</u> ：

実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。(エペソ 5 章 11 節)

そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。(ヨハネ 3 章 19 節)

わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの[天使的]支配と、[天使的]権威と、[天使的]やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。(エペソ 6 章 12 節)

[父なる]神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。(コロサイ 1 章 13 節)

神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。(ヨハネ第一 1 章 6 節)

兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである。(ヨハネ第一 2 章 11 節)

b. 善の象徴としての光:

この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。(ヨハネ 1 章 4-5 節)

わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。(ヨハネ第一 1 章 5 節)

あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上　から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。(ヤコブ 1 章 17 節)

都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。 諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。(黙示録 21 章 23-24 節)

c. <u>闇と光の対比</u>:

しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。(マタイ 6 章 23 節)

そのさばき[の根拠]というのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。(ヨハネ 3 章 19 節)

それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである』。(使徒行伝 26 章 18 節)

夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。(ローマ 13 章 12 節)

あなたがたは、以前はやみであったが、今は主にあって光となっている。光の子らしく歩きなさいーー (エペソ 5 章 8 節)

不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。(コリント第二 6 章 14 節)

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。(ペテロ第一 2 章 9 節)

しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その[主の]日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。 あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。(テサロニケ第一 5 章 4-5 節)

d. <u>神の裁きによる暗闇</u> :聖書に出てくる暗闇の中で、神の裁きに伴う文字通りの光の遮断という特別な種類の暗闇があります。この種の暗闇は、特別注意を払うべき重要なもので、創世記 1 章 2 節の暗闇に関しては、まさにこの種の暗闇です。原初の地球上でのサタンのしたことの結果、神はその太古の世界を裁き、地球はサタンの罪に伴って、呪われてしまいました(ちょうど、後に復元された地球がアダムの罪に伴って呪われたようにです: 創世記 3 章 17-19 節; ローマ 8 章 19-22 節)。

それに対する神の裁きの結果の一つが、（宇宙も含む）原初の地球が暗闇にされることでした。闇は悪の**象徴**であると同時に、神の裁きの一環として文字通り与えられた現実であると言えるでしょう（例：イザヤ 45 章 7 節では、「創造された」暗闇は「わざわい」のさばきに、光は「繁栄」に例えられています。また、イザヤ 5 章 30 節、8 章 22 節、エゼキエル 32 章 7-8 節、使徒行伝 13 章 11 節参照）。

1. <u>パロの王国を襲った超自然的な暗闇</u>:

暗闇はエジプトに与えられた十の災いの一つで、パロに対して神の力が示されたものです（出エジプト 10 章 21-29 節; 詩篇 105 篇 28 節参照）。エジプトの他の地域は主の強力な裁きによって「ブラック・アウト（真っ暗闇に）」されましたが、イスラエル人はこの災いを免れました（出エジプト 10 章 23 節）。闇は明らかに恐ろしく、はっきりとした呪いであり、最後の災いであるエジプト人の長子の死の直前の災いとなりました（出エジプト 11 章）。出エジプト記 14 章 20 節では、同様に神がすべての光を消し去っています。ここでは、神の臨在の雲がエジプト軍を抑制するために超自然的な暗闇を作り出し、同時にイスラエル人に光を与えています（ヨシュア記 24 章 7 節参照）。

2. <u>十字架の超自然的な暗闇</u>:

過越の子羊は私たちのために死なれたイエス・キリストの痛ましい予型です。子羊は「夕べの間」（夕は複数になっています：　つまり、昼とも夜ともつかない時間帯：出エジプト記 12 章 6 節; 29 章 39-41 節）＜訳者註：複数の夕についてアダム・クラーク氏による出エジプト 12:6 についての註から→夕方に - בין הערבים beyn haarbayim,「between the two evenings 二つの夕の間」。 ユダヤ人は一日を朝と夕方に分けていた。太陽が子午線を通過するまではすべて朝(午前)で、それ以降はすべて午後か夕方であった。最初の夕方は十二時過ぎに始まり、日没まで続き、二番目の夕方は日没から夜まで、つまり薄明かりの間中、過越の祭りが捧げられたのである。訳者註終わり＞に屠られるように命じられましたが、全人類のためのキリストの死も類似したものです。しかし、その運命の死は、超自然的な暗闇が伴いました。共観福音書記者は三人ともこの暗闇を記録しています（夏時間で、三時間ほど続きます：マタイ 27 章 45-54 節、マルコ 15 章 33-39 節、ルカ 23 章 44-49 節）。ルカは「太陽が消えた」（文字通り「日食」）という重要な詳細を付け加えています。この未曾有の暗闇の直後、神殿の垂れ幕が奇跡的に二つに裂けました。そして主は息を引き取られますが、これは、主が復活される前の最後の息となります。このように、十字架の超自然的な暗闇もまた、神の裁きのしるしであり、主イエス・キリストが私たちのすべての罪に対する御父の裁きを受け、私たちの代わりに死なれたのです。私たちが永遠に主と共に光の中で生きるように、主はこの恐ろしい暗闇とそれに伴うすべてのことに耐えられたので

す。

3. 再臨の際の超自然的な暗闇:

主の帰って来られる(再臨)の前に、地球は歴史上最も恐ろしい時期である大艱難の期間を迎えます(ダニエル 12 章 1 節、マタイ 24 章 21 節と 29 節、マルコ 13 章 19 節と 24 節、黙示録 7 章 14 節)。しかし、悪魔と反キリストがすべての信者の抹殺を達成する前に、「主の日」が始まります。これは、かつてないほど地を揺るがす驚異と裁きの日であり(ヨエル 2 章 1 節 ff.)、超自然的な暗闇の期間は、キリストの再臨に先立つ差し迫った裁きの最終的な兆しの一つとして預言されています(イザヤ 13 章 9-13 節; 34 章 4 節; 60 章 1-2 節; エゼキエル 32 章 7-10 節; ヨエル 2 章 2 節, 2 章 10 節, 2 章 31 節; 3 章 15 節; ゼパニア 1 章 15-18 節; ゼカリヤ 14 章 6-7 節*; マタイ 24 章 29 節; マルコ 13 章 24-25 節; 使徒行伝 2 章 17-21 節; 黙示録 6 章 12-13 節)。<＊ゼカリヤ 14 章6節-新共同訳　その日には、光がなく/冷えて、凍てつくばかりである。>

4. 火の池の超自然的な暗さ:

聖書で説明されている「地獄」のイメージは、一般によく受け入れられている多くのものとはかなり異なっています。今回のテーマの別の側面は、地獄が燃える硫黄の火の池として描写されているにもかかわらず(イザヤ 66 章 15-16 節と 24 節、ダニエル 7 章 9-11 節、マタイ 3 章 11-12 節、5 章 22 節、18 章 8-9 節、25 章 41 節、マルコ 9 章 43 節と 48 節、ヤコブ 3 章 6 節、黙示録 19 章 20 節、20 章 10 節、14-15 節、21 章 8 節)、そこは耐え難い**暗闇**の場所であるということです。生前にキリストを拒絶した人々の住むことになる「外の暗闇」では、彼らが生前にかたくなに拒絶したもの、すなわち「光」は取り去られた状態となります(ヨハネ 3 章 19-21 節)。出エジプトの災いの暗闇(出エジプト 10 章 21 節)や黙示録の第五の鉢の審判(黙示録 16 章 10-11 節)が触れることができる暗闇であるように、これもまた、さわれることのできる、苦痛を伴う暗闇となるでしょう(マタイ 8 章 12 節、22 章 13 節、25 章 30 節)。今でも、このような超自然的な暗闇と火が、暫定的な<中間の>地獄(不信心な人間のためのもの:ルカ 16 章 24 節、ペテロ第二 2 章 17 節、ユダ 13 節)とタルタロス(ある種の堕天使のためのもの:ペテロ第二 2 章 4 節、ユダ 6 節)に存在していますが、究極の「火の池」がその最初の住民を迎えることになるのはまだです(黙示録 19 章 20 節、20 章 10 節)。

したがって、聖書の他の箇所での暗闇の使用と意味について私たちが知っているすべてのことから、(創世記 1:2 のように)光のない暗闇の宇宙についての描写は、祝福ではなく、**呪い**の現状についての表現であり、本来の奇跡的な創造ではなく、**神の裁き**の現状を表現しているということです。

3．海：

他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり–やみが深淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。
創世記 1 章 1–2 節

聖書の象徴において、海は通常、肯定的なしるしではありません。それどころか、海はしばしば悪と関連付けられています。聖書の他の箇所で使われている用法と同様に、地表が深淵の下にあるという記述は、非常に否定的なイメージを伝えています。つまり、祝福のイメージではなく（創世記 1 章 1 節から原初の素晴らしいパラダイスを想像しますが：第 1 部参照）、これは呪いのイメージです。このことは、聖書の中で「海」が象徴的にどう使われているかを調べればすぐにわかります。

a. 水と陸の対比： 今日、私たちは海に対してややロマンチックなイメージを持っていますが、イスラエル人のような古代の農耕民族の視点では、土地が重要とされていたことを理解する必要があります。海上交易にあまり関係のない人々にとって、海は耕作や居住や相続の可能な領域の境界を示すものです。価値あるものは土地であって、海はその限界を示すものに過ぎませんでした（例： ヨシュア記 15 章 12 節 & 47 節; 23 章 4 節）。主がイスラエル人に約束したのは、「乳と蜜の流れる」（出エジプト記 3 章 8 節，17 節; 13 章 5 節; レビ記 20 章 24 節）良い土地であり、その恵みは決して海に由来するものではありません。この「良い土地」は、経済だけではなく、永遠の相続の原則によって、現在と未来の共同体の基礎となるものでした（レビ記 25 章 8–55 節）。このような観点から見ると、暗黒の深淵（＝深海）と全地球を飲み込む普遍的な海の水への言及（創世記1章 6–10 節で暗示され、さらに確認されています）は、同時代の聴衆にとっては極めて不吉なものにしか見えなかったことは明らかでしょう。この印象は、乾いた土地を再び出現させるために、神がこれらの水を取り除き、集めたことに対する神の評価によって強くなります。「そして、神はそれ（かわいた土地と海の分離）を良しとされた」（創世記 1 章 10 節）。私たち人間は、人種として、もともと地表から取られたものであり（創世記 2 章 7 節）、アダムの罪の結果、一時的に呪いで汚されたとはいえ（創世記 3 章 17–19 節）、農耕は、私たちに注がれる神の恵みの主要な供給源の一つとなっています（使徒 14 章 17 節）。土地、つまり地球は、イエス・キリストの再臨のときに、その贖いと回復を見ることになります（使徒 3 章 21 節、ローマ 8 章 19–22 節）。海は、その独特の恵みと魅力にもかかわらず、本質的に人間の生活を寄せ付けず、その性質上変化しやすいものであり、永遠に続く相続という神の約束とは完全に相反する性質を持っています。

b.神の裁きのしるしとしての海: 本シリーズの第 1 部で詳しく説明したように、黄泉（ハデス）、あるいは「地獄」と呼ばれているところは、三つの区画に分かれています。

1) キリストが昇天する前に死んだ信者の場所である「アブラハムのふところ」（ルカ 16 章 19-31 節）、

2) 今日まで救われずに死んだ者の場所である「地獄」または本来のハデス（「シェオール」、「ゲヘナ」、「苦悩」、「墓」とも呼ばれる）（マタイ 5 章 29-30 節; 23 章 33 節; ルカ 12 章 5 節; 16 章 23 節; 黙示録 20 章 13-15 節）。

3) 堕天使の一部が現在収容されている場所である深淵（ルカ 8 章 31 節、ペテロ第二 2 章 4 節、ユダ 6 節、黙示録 9 章 1-11 節; 20 章 1-3 節）。

ですから、創世記 1 章 2 節を「深淵」＜新共同訳＞という言葉で訳すことは（原初の創造の祝福を反映したものではなく）、背景に神の裁きがあることを示唆しています。そういうわけで、この翻訳が正当化されるのには理由があります。
創世記1章2節で「深淵」と訳されている言葉（しばしば「深いところ」と訳される）は、ヘブル語のテホムtehom（תהום）です。ここでは、ヘブル語で海を意味するずっと一般的な言葉（ヤムyam, ים）が使われる代わりにテホムが使われています。この言葉は通常、ドラマチックで力強い出来事を暗示し、しばしば神の裁きに伴って使われます（出エジプト記15章5節と8節＊、ヨブ記38章16-17節、詩編42篇7節、71篇20節参照）＜＊フランシスコ訳→「...深淵（テホム）の水は海の真ん中で固まった」出エジプト15章8節＞。この点は、紀元前3世紀にヘブル語聖書をギリシャ語に翻訳した有名な七十人訳（セプトゥアギンタLXX）を作った古代の学者たちにも理解されていました。彼らは、「海」を表す一般的なギリシャ語を使わず、「テホム」をギリシャ語の「アビソス」（abyssos ἄβυσσος）と訳しました。英語の「アビスabyss（深淵）」という言葉もこれに由来するものです。この時点から、七十人訳では、テホムの訳語としてアビソスが圧倒的に多く使われ、後に新約聖書の著者に大きな影響を与えることとなりました。例えば、ヨハネの黙示録では、獣が「海から上ってくる」（黙示録13章1節、ダニエル7章3節も参照）と表現されている箇所があり、別のところでは「底知れぬ所からのぼって来る」（黙示録11章7節; 17章8節）＜新共同訳では「底なしの淵」いずれもギリシャ原語では「アビソス」となっている＞と表現されています。つまり、使徒ヨハネは、黄泉＜ハデス＞の裂け目を意味するこの名前と、その深淵を覆う海とを置き換えることに違和感はなかったのです。このように、聖書の観点からは、地球の地下の領域は、それを覆っている深い海と一体であると解釈することができます（陰府（シュオール）と「海の下」は一つであるとするヨブ記26章5-6節参照のこと＜新共同訳では「陰府の淵に住む者たちは水の底でのたうち回る」とあります＞）。

このように、海とその下にある冥界とを同一視することは、黙示録の難しい箇所を説明するのに役立ちます。最後の審判の時には、「海はその中にいる死人を出し」（黙示

録 20 章 13 節)という箇所がありますが、ヨハネがこの言葉に続けて「死も黄泉もその中にいる死人を出し」と言っているのは、預言的には、一方の「海」と他方の「死と黄泉」との間には実質的に違いがないということを説明しているに過ぎません(「獄」または「地獄」の一つの場所に対する二詞一意の表現)。海(正確には海の下の黄泉)は、死んだ未信者(信者はキリストの昇天によってアブラハムの懐から天に移されている)と、今は幽閉されている悪霊の現在の居場所です(参照:ペテロ第一 3 章 19-20 節; ユダの手紙 6-7 節; 黙示録 9 章 1-20 節参照)。後者は、そのリーダーであるサタンとともにずっと前に裁きを受けており(ヨハネ 16 章 11 節)、ついにサタンの反乱が打ち砕かれた後は、それ以上の裁定は必要ありません。しかし、海の底にある底知れぬ幽閉された黄泉の国にいる「死人」(不信心者)は、人類の歴史の終わりに、火の池に送られる前の裁きがあります(黙示録 20 章 11-15 節)。

聖書の中で海はしばしば地獄に対応しており、創世記 1 章 2 節において海がこのような世界を包括する形で登場していることを、中立的な存在として受け取ってはならないことを示しています。不完全な世界、神の裁きを受けている世界**、地獄を必要とする**世界には海があります。海の存在(特にテホム-深淵の海)ということからして、創世記 1 章 2 節は、畏敬の念を起こさせる神の裁きの結果を扱っているのであって、創世記 1 章 1 節の原初の創造ではないことを強く示唆しています。

c. <u>神の裁きの道具としての海</u>: 海は、神の裁きが起きたことを示すだけでなく、その裁きの道具となることもあります。このような神の裁きのケースは聖書の中では比較的珍しく、常に非常に重要な出来事です。今検証している創世記の裁きの他に、二つの大規模な「水の裁き」があります。

1. <u>洪水前の文明(創世記 6-9 章; またペテロ第二 2 章 5 節、3 章 5-7 節参照)</u>:
海が地を完全に覆った創世記の空白期間の裁きと同様に、この場合も神はその古代文明を「惜しまず」、「その不信心な人々の上に洪水をもたらした」(ペテロ第二 2 章 5 節-<英文直訳>)のです。水は、ノア以前の文明を消滅させる手段であり、神の最も壮大な水の裁きの一つであり、当時の罪深い世界を完全に消滅させました。その後、ノアへの約束は虹で封印され、この大洪水と創世記の空白期間における普遍的な水の裁きは、起こらないことを私たちに保証しています(創世記 9:8-17)。

<u>2. 紅海の中のエジプト人(出エジプト 14-15 章:</u>
大洪水のような世界大の水の裁きがないという事実は、水が神の裁きのためのより局地的な手段ではなくなったということではありません (ツロの例があります: エゼキエル 26 章 19-21 節)。その中でも最も壮大なものは、紅海を通ってイスラエル人を追って

きたパロとその軍隊の破壊です。神はご自身の力と威厳を示すために、この巨大な水を実際に分け（出エジプト記 14 章のシリーズを参照＜https://ichthys.com/Exodus-14-Home-Page.htm＞）、その後、パロとその従者たちに完全で壊滅的な裁きを与えるために、水を元の場所に戻しました（出エジプト記 14 章 18 節; 15 章 1-18 節）。

創世記の空白期（ギャップ）の裁きに加えて、ソドムとゴモラの裁きも、同様なものとして考えられます。創世記 1 章 1-2 節では、神の裁きの結果、全地球を取り囲む海の深淵が聖書に記されていますが、ソドムとゴモラの場合は（創世記 19 章 23-29 節）、火と硫黄が地域全体に「降り注いだ」裁きだけが聖書に記されています。しかし、これらの都市は死海の水の下に位置していたとしか考えられません（死海は、現在、創世記 13 章 10 節 ff の「ヨルダンの平野」を覆っています。ゼパニヤ2章9節参照） 同様に、有史以前の地球の化石の記録は、古代の生き物として人気のある恐竜の一部は、大災害によって死滅した（火と硫黄の死）と考えられがちです。（その理由として、原初の地球におけるサタンの倒錯した行いに対する神の裁きの説明をしているわけですが）、聖書には、裁きの結果（つまり海）が述べられているだけです。

これらの水の裁きに共通しているのは、いずれも並外れて邪悪で残虐な行為によって引き起こされたということです。洪水前の世界の前代未聞の悪（創世記 6 章 1-7 節; 8 章 21 節）、ソドムとゴモラの市民の非道な行動（創世記 19 章 4-25 節; ペテロ第二 2 章 6-10 節、ユダ7節）、そしてパロの異常な心の頑なさ（出エジプト記 14 章シリーズの＃2参照のこと）、すべては創世記 1 章 2 節にあるような水の裁き（すなわち、全地球、完全な荒廃）が下るには、神の正義を下らせる何か恐ろしいことがあったに違いないことを示唆しています。この時点で、天使以外に道徳的に責任のある生き物が存在しなかったことを考えると、サタンの反逆がこの地球の完全な浸水を引き起こした原因であることを、さらに強く証明していると言えるでしょう。このように創世記 1 章の背景状況を考えると、＜水に覆われた地球に＞次に起こりそうなことはよく理解できます。神が水から土地を回復されたことは、悪の支配からの非常に明確な回復と解放の表現です（イスラエルの民が紅海を通過して脱出したことや、私たちが「やみの力から」「愛する御子の支配下に」移されたことを参照のこと。コロサイ 1 章 13 節）。水は象徴的に悪を洗い流し（ヨハネの水のバプテスマの儀式によく似ています）、今、神の恵みによって新しい命を再び自由に手にすることができます。[6]

最後に、神が原初の創造のわざをなされた時、水浸しの世界、つまり生命の可能性がなく、どこまでも暗い水が広がっている世界を創造されたのだろうかということを、特にそのような状態は、聖書によると強烈な裁きの特徴を示唆していることを念頭に入れて、問うてみる価値があります。創世記 1 章 2 節は、神が最初に地球を創造された際

[6] このシリーズの第 5 部「裁き、回復、交代」の II.7 節「人類史の 7 日間」を参照。

の特徴というよりも、裁きによってもたらされた後遺症（後遺症を打ち消すには、次に続く文節で述べられている回復が必要となります）を語っていると考える方がはるかに理にかなっていると思います。

d. 悪の媒体としての海: 聖書では、生活物資の必要性は認められていますが、過去においても、預言されているものも含めて、傲慢で偶像崇拝的な超商業は、海に依存しており、海と特別な関係を持っています。ツロ(イザヤ 23 章 1-18 節、エゼキエル 26-28 章)と反キリストのバビロン(黙示録 18 章 11 節 ff)の過去の記録と将来の預言から、世界規模の傲慢な商業(偶像崇拝に関連し、売春に象徴される)を維持し、それに関与する者達に悪影響を与えていますが、それらをつなぐ役割を果たしているのが海です。重要なことは、この研究の第 1 部でも述べたように、ツロの王子の「商売＜原語には「行き来」「往来」の意味がある＞」は、多くの仲間の天使を誘惑して自分の目的に参加させようとするサタンの活動を象徴的に表していることです（エゼキエル 28 章 12-19 節）。

e. 反キリストの起源点としての海: 海は、獣、すなわち反キリストが上って来る場所です（黙示録 13 章 1 節）。キリストに最も完全に反対し、サタンと最も密接に行動する者（テサロニケ第二 2 章 9 節）の起源点として、海は祝福よりも呪いと結び付けられそうです。「海から上って来る」ものとしての象徴的存在は、まずダニエル 7 章 3 節で登場します。歴史上の四つの主要な反神帝国は、すべてこの海から発生し、最後のものは歴史的にも預言的にもローマでした。それからその帝国の「獣」という名は、黙示録 13 章 1節の支配者に引き継がれ、海を歴史的に神に最も反する帝国の起源点としてだけではなく、キリストに反する皇帝の起源点としています。（参照: ダニエル 7 章 3-14 節、9 章 25-27 節、11 章 21-45 節、テサロニケ第二 2 章 1-12 節、黙示録 13 章 1-18 節、17 章 1-18 節）。ヨハネの黙示録 13 章 1 節では、サタンが反キリストを海から呼び寄せる様子も描かれています。さらに、海は深淵のような場所で、サタンに捕らえられている一部の従者らの現在の住処であり（ペテロ第二 2 章 4 節、ユダ 6 節、黙示録 9 章 1-11 節参照）、将来のサタンの一時的な監獄であり（黙示録 20 章 1-3 節）、悪魔とすべての堕天使の最終的な住処にも類似しています（つまり、理由があって火の**池**なのです: マタイ 25 章 41 節; 黙示録 20 章 10 節）。また、今回の研究の目的は、サタンが最初のエデンを一時的に支配した後に、神が最初の地球を裁くために使った手段が海であったことを示すことであることを覚えておいてください。このように考えると、黙示録が、サタンの世界支配の主要候補である反キリストと、創世記の空白期間に神がサタンを裁いた手段と場所である海とを結びつけるのは、サタンが世界を完全に支配しようとする最後の試み（ハルマゲドンで神の裁きを受けることになる）と、最初の試み（創世記の空白期間の裁きを受けたこと）とを密接に結びつけることになります。このように、海と

神の悪への裁きを結びつける象徴は、創世記から黙示録に至るまで、聖書全体に見られる重要なテーマなのです。

f. サタンを象徴する怪物の住処としての海: 海は、悪魔の主な手先である反キリストの象徴的な起源点であるだけでなく、深海の二つの神話的な怪物であるレビヤタン(ヨブ記 3 章 8 節; 41 章 1-34 節; 詩篇 74 篇 12-14 節; イザヤ 27 章 1 節参照)とラハブ(ヨブ記 9 章 13 節; 26 章 12-13 節; 詩篇 87 篇 4 節; 89 篇 9-10 節; イザヤ 30 章 7 節; 51 章 9-10 節)が同一のものであるとするなら、サタン自身も海との密接な関係を持っていることがわかります。聖書の作者たちは、これらの伝説的な生き物の名前を使って、サタンを(龍-蛇として)象徴的に表現しました(アモス 9 章 3 節参照)。

> **その日**(すなわち、艱難の後の再臨から始まる主の日; イザヤ 26 章 20 節参照)**、主は堅く大いなる強いつるぎで逃げるへびレビヤタン**(すなわちサタン、黙示録 12 章 1 節-13 章 1 節参照)**、曲りくねるへびレビヤタンを罰し、また海における龍**(あるいは怪物)**を殺される。(イザヤ 27 章 1 節)**

しばしば、これらの怪物は、サタンに触発された帝国を表すためにも使われます(ダニエル7章の獣と比較してください)。例えば、次の箇所では、出エジプト記のサタンのエジプトがラハブと呼ばれています(ここでは、通常の海を表す言葉であるヤムではなく、「大いなる深み」を表すテホムが使われていることにも注目してください; 上記 I.3.b. 項参照)。

> **主のかいなよ、さめよ、さめよ、力を着よ。さめて、いにしえの日、昔の代にあったようになれ。ラハブを切り殺し、龍を刺し貫いたのは、あなたではなかったか。 海をかわかし、大いなる淵**(テホム)**の水をかわかし、また海の深き所を、あがなわれた者の過ぎる道とされたのは、あなたではなかったか。 (イザヤ 51 章 9-10 節)**

g. 海が取り除かれる: 黙示録 21 章 1 節を読んだ多くの人は、永遠の国に海がないことで、頭を悩ませてきましたが、上記に述べられた事柄を考慮すると、驚くことではありません。悪が宇宙から永遠に追放され、「義が宿る」(ペテロ第二 3 章 13 節)新しい天と地についに住むことになったとき、裁きの手段としても、過去の裁きの記念としても、海はもはや必要ありません。この強烈な真実は、創世記 1 章 2 節の海を、サタンの反抗的な活動に対する神の最初の裁きの結果(記念)と見なし、神の原初の地球の創造の一環ではないと理由づけてくれます。

4. 聖霊の抑制する働き:

> 他のすべてに先んじ、神は天と地を創造された。しかし、地は荒廃し廃墟となり–やみが深淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。
> 創世記 1 章 1–2 節

ここで、御霊(聖霊)の阻止する者としての役割という面からも、創世記 1 章 2 節は、第 1 節の創造の話の続きではなく、サタンとその先史時代の反乱に対する神の裁きによってもたらされた状態を描いていることを示すことにします。聖霊は、悪の活動と実践を妨げる抑制者としての役割を果たしますので、創世記 1 章 2 節において御霊が言及されているのは、おそらく御霊(聖霊)は、創世記の空白期に先行していた第1節の創造された原初のエデンが裁きによって荒廃と化した別の世界の地球を対処していることを示す最も強力な証拠となっています。御霊の抑制の働きには次のようなことがあるとわかります:

a. <u>個人レベルでの聖霊の阻止する働き</u>:

先行の神学の学習では、聖霊は(その名前の由来である)風のようで、強力で目に見えない力であることについて大まかな学びをしました。[7] イエスが風をたとえて語られたように、私たちはその存在に気づき、その影響を受けますが、それがどこから来て、どこへ行くのかを知ることはできません(ヨハネ 3 章 8 節)。御霊の働きの場合も、私たちは(信者らがキリストを見たように)御霊を見たり、(聖書で父の言葉を読んで把握するように)御霊の言葉を聞いたりすることはありませんが、私たちは信者として行うすべてのことにおいて、御霊の力と影響力に大きく依存しています。このことは、クリスチャンに聖霊が宿っている今の時代において、特に言えることです。聖霊の働きは数多く、力強いものですが、今回の焦点となる課題は、罪や悪を考えたり行ったりすることに聖霊が抵抗し、罪や悪に対する障壁としての役割についてです。人類がいまだに自滅していないことの理に適う唯一の説明は、この聖霊の力が人類の歴史の夜明けから働いているということです。聖書の中で時折、聖霊の重要な働きを垣間見ることができますが、これは間違いなくすべての人間、特に信者の人生の大部分に働いているものです(ペテロ第二 1 章 2 節)。例えば、悪が行われるのを阻止するという観点から見ると、聖霊がサウルとその部下に恍惚状態をもたらすことで、サウルがダビデを処刑するのを妨げることができました(サムエル記上 19 章 20–24 節)。一方、悪から信者を守るという観点からは、第二次伝道旅行でパウロとその仲間がアジアとビテニアに入るのを聖霊

---

[7] 聖書の基礎知識シリーズの第 1 部、神学をご覧ください。神の研究」、「ペテロの手紙」第 10 課を参照。悪を抑制する聖霊の働きについては、2B 来るべき患難の第 III 部、「聖霊の抑制の働き」を参照してください。

が妨げたことを挙げることができます（使徒 16 章 6-7 節）。パウロは、御霊が私たち一人一人への個別の働きの中で、罪や悪に対抗することを説明していますが、この原則はすべてに当てはまるものです（ヤコブ 4 章 5 節はギリシャ語で、ガラテヤ 5 章 17 節と本質的に同じことを言っていることに注意してください）。

> **なぜなら、肉**（すなわち、人間の罪深い性質）**の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(ガラテヤ 5 章 17 節)**

この節の最後の部分は、個人に対する聖霊の抑制の働きのほとんどの例と、以下で取り上げようとしている包括的宇宙的な聖霊の働きの違いを理解するのに重要です。私たちは、自由意志の働きによって、聖霊の個人的な働きを制限する立場にあります。神は私たちが間違いを犯さないように導き、抑制してくださいます。しかし、究極的には、私たちが悪を行おうと完全に決意しているときに、神が私たちの自由意志を奪い、悪を犯さないようにすることはありません。これが「御霊を消す」（テサロニケ第一 5 章 19 節）や「御霊を悲しませる」（エペソ 4 章 30 節）の意味するところです。つまり、御霊がはっきりと制止しているにもかかわらず、間違った行動を取ることに頑固にこだわることです。もっと極端な例としては、「聖霊を欺く」こと(使徒行伝 5 章 1-11 節)や「聖霊を汚す＜冒涜する-新共同訳/新改訳＞」(マタイ 12 章 31 節)などがあります。これらの場合に共通しているのは、罪や悪に対する聖霊が抵抗しているのに人間が＜罪や悪に＞固執していることですが、しかし、これらすべての場合において、聖霊が間違った行為をもはや抑制することができなくなる限界点があります。自由意志による行為がそれです。

b.<u>聖霊の世界的な抑制の働き</u>: 聖書には、人類全体に対する二つの重要な聖霊の働きも記されています。聖霊による大規模な抑制の例では、人類の歴史全体の流れが影響を受けます。個人の場合と同じように、聖霊が人間の問題に介入する実際の範囲は、（例えば、使徒行伝 17 章 26-28 節にはっきりと暗示されているように）聖書の次の箇所に記されていることをはるかに超えていると考えることができます：

1. <u>邪悪な洪水前文明における抑制</u>：

人類に対する大洪水前の悪魔の攻撃については、このシリーズの第 5 部で検討されていますので、ここでは、その大洪水の前の時代に、真の人類が絶滅寸前であったことを述べるだけで十分でしょう。天使が「人の娘たち」と交わったことで、人類とは思えないようなものが生み出され、人類は絶滅しかけていたのです（これは創世記 6 章 1-2 節の最も端的な解釈です。ペテロ第二 2 章 4-5 節とユダ 6-7 節を参照してください。

また先史時代においてサタンによる似たような「実験」がなされたことがこのシリーズの第一部で紹介されています）。これが疑いもなく、昔から私たちに語り伝えられてきた多くの神話に登場する英雄-超人についての真実の核心であって、それは天使から出てきた子孫で、確かに「有名な人々」（創世記 6:4 参照）であったことでしょう。しかし、この新しいハイブリッド種族は、肉体的には強力であっても、神と、そして暗に神の真の民に対して憎悪をもって激しく敵対していたようです（創世記 6 章 5 節と 6 章 9 節）。「私の霊は人と果てしなく争うことをしない」＜争う-欽定訳。ヘブル語でもディイン（争う、裁く）＞という聖霊の抑制があったからこそ、アダムの汚染されていない種は、神が地上からそれら＜ハイブリッド族＞を根絶する時まで、これらの怪物と共存することができたのです（創世記 6 章 3 節、5-9 節も参照のこと）。

2. <u>罪の人の抑止</u>：

御霊が反キリストを抑制する場合には、別の種類の抑止力が見られます（テサロニケ第二 2 章 6-8 節）。創世記 6 章のように、本質的に邪悪な存在の大集団の行動を阻止するのではなく、聖霊は実際に、史上最も邪悪な人間である獣、すなわち反キリストが歴史の舞台に現れるのを阻止しているのです。この働きによって、聖霊は、神の民に対するサタンの激しい攻撃が、適切な時期の前に起こることを阻止しているのです。キリストの教会が、この時代のすべての瞬間において、すべての霊的機会においてその役割を果たし終えるまで、御霊が身を引いて、艱難期が始まってしまうのを許されないのです。第二テサロニケ 2 章 6-8 節の「阻止する者」が聖霊であるかどうかについては、福音主義者の間で議論があります（聖霊の抑制の働きは他にもよく知られているにもかかわらず、です）。しかし、ヨハネの黙示録 5-6 章で、苦難が始まる前に 7 つの封印が「巻物」から解かれなければならないという事実は、封印という考えに暗示されているように、聖霊が抑制者（反キリストと苦難を抑える）であることを明確に示しています。聖霊は他の箇所で「七つの霊」と表現されています（イザヤ 11 章 2 節; 黙示録 1 章 4 節: 3 章 1 節; 4 章 5 節; 5 章 6 節）。 また、新約聖書の他の文脈においても、聖霊の証印する働きはよく知られています（コリント第二 1 章 22 節; エペソ 1 章 13 節; 4 章 30 節）。この最後の点は、聖霊の抑制の働きについての議論を始めたところに戻ってきます。聖霊は、私たちを反キリストから守り、彼と彼の世界的な恐怖の支配を、その時が来るまで封じます。私たちが神から与えられた自由を使って聖霊の働きを妨げないように気をつけるだけで、聖霊は私たちの救いに対するすべての脅威から私たちを守るためにも、私たちに証印しているのです（コリント第二 1 章 22 節;　エペソ 1 章 13 節; 4 章 30 節; ペテロ第一 1 章 2 節参照）。

創世記 1 章 2 節は、明らかに世界的な聖霊の抑制のケースです。地上に裁きのために注がれた暗い水の上に聖霊が「おおっている＜原語は「雛を育てる」の意味もある＞」という描写は、抑止力を意味しています。具体的には、これ以上の悪魔の活動、

地上でのさらなる干渉、裁きの効果を覆そうとする＜堕落＞天使の試みを抑制することです。神はこのようなことを許されません。抑制モードの御霊の存在は、このことをはっきりと示す役割を果たしています。修復（回復）の七日間の前に、地球は最も強力な「錠」で「封じ」られており、サタンが活動を再開しようとしても不可能です。

> わたしは海であるのか、龍であるのか、あなたはわたしの上に見張りを置かれる。(ヨブ 7 章 12 節)

5. サタンの反乱のタイミング：

最後に、サタンの反乱を創世記の空白の期間（つまり、天地創造から最終的に地球が再創造されるまでの期間で、その長さは不詳）に置くべきだという上述の説得力のある理由に加えて、実際には、それ以外に合理的に位置づけることができる時点はありません。天使たちが地球の再創造（と海の制限:ヨブ記 38 章 4-11 節）を喜んで歌ったのは明らかですが、その後、アダムとエバの創造に続いて、サタンによるアダムとエバの誘惑が後に続いたことも明らかなので、この時期＜七日間の創造後＞にサタン自身が堕落して天使の大部分を誘惑する時間はほとんどありませんでした（創世記 1-3 章; このシリーズの第 1 部を参照）。

III. 創造と再創造

他のすべてに先んじて、神は天と地を創造された。
創世記 1 章 1 節

創世記 1 章 1 節には、天と地の最初の創造が記されています。この宇宙の最初の創造は、父によって指示され（創世記 1 章 1 節と 3 節、黙示録 4 章 11 節）、御子によって実行され（コリント第一 8 章 6 節; コロサイ 1 章 16 節）、聖霊によって力づけられました（詩篇 33 篇 6 節; 箴言 8 章 27-31 節）。それは瞬時のわざであり、真の「ニヒロ（無/ゼロ）からの創造」、つまり、神の意志と力を除いて何もないところから宇宙全体を生み出した創造的な行為でした。宇宙は広大ですが、神に比べれば取るに足らないほど小さいのです（列王記上 8 章 27 節; 使徒行伝 17 章 24-26 節）。私たちは、天が無限であると考えるかもしれませんが、神の真の無限性の前では、有限としかみなせな

いことでしょう。[8]宇宙の創造のわざは、私たちが親しんでいる自然の原則によると、それは、不可能なことで、定義的には奇跡です。

もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息（御霊）によって造られた。(詩篇 33 篇 6 節)

すべてのものは、これ（御子）によってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(ヨハネ 1 章 3 節)

万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。 彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(コロサイ 1 章 16-17 節)

この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 2 節)

しかし、これまで見てきたように、創世記 1 章 2 節は、文法的には第 1 節から分離した、突然の逆接構文となっています。2 節では、原初の荘厳な創造のわざから途方もなく長い空白期間を飛んで、神が地球を再創造する直前の宇宙の状態を私たちに説明しています。

しかし、地は荒廃し廃墟となり−やみが深淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。　　創世記 1 章 2 節

原初の被造物は、サタンの反乱によって荒らされ、反乱を起こした天使たちに対する神の裁きによって闇に陥れられました。物質的体を持った生物が再び住める宇宙にするためには（堕落前のサタンのプロパガンダでは、肉体を持とうとすることが大きな問題となっていたことは、第 1 部で学習したところです）、地球の再創造が不可欠でした。創世記 1 章 3 節から 2 章 3 節までの七日間の記述は、この天地の再生についての記述です。この七日間のプロセスの背景には、人間の創造という目的もあることは、明確です。神が再創造の期間中に成し遂げようとしていたことはすべて、この自由意志が与えられた第二の被造物が生きていくために神によって特別に計画されたものでした。

---

8 「聖書の基本教義」の第 1 部をご覧ください。神学：神の研究。

1. 再創造の 7 日間： アダムとエバの創造、サタンの誘惑、アダムとエバの堕落、そして彼らに対する神の裁きについては、このシリーズの第 3 部で説明しますが、まず、七日間の間に地球が再創造されたことについて、いくつかの点を検討する必要があります。

a. 創世記 1 章 3 節の時点で、天と地が存在していたことは、これが再創造であることを示しています： 創世記 1 章 3 節で神が地に対してみわざを始められた時、地（とそれをおおう天）がすでに存在していました（再創造でなければ、可能ではありません）。

b. 七日の間、天使たちが存在していることは、これが再創造であることを示しています： 天使たちも存在していて、地球の再創造に「喜びの声を上げている」のです。（これもきっと、創世記の空白期前のある時期に創造されたもので、再創造でなければあり得ません： ヨブ記 38 章 4-7 節）。

c. 神が自らの行為を「良い」と宣告することは、これが再創造であることを示しています： 神は、神であるがゆえに、最初から良いものだけを創造します。暗闇から光を、海から乾いた土地を、無生命から生命をもたらすことは、すべて「良くないもの」（すなわち、暗闇、海、無生命）から「良いもの」をもたらす行為なのです。そして、神はそれが良かったのを見た」という宣告は、元々良かったものが、悪への裁きを経て「良かった」状態に回復したことへの神の承認です（創世記 1 章 4 節, 10 節, 12 節, 18 節, 21 節, 25 節, 31 節）。

d. 神による天空の建設は、これが再創造であることを主張しています： 創世記 1 章 6-8 節で、神は「上の水」と「下の水」を隔てる大空を作り、この大空を「天」と呼んでいます。さて、この大空が造られる前に、この大空の下にある地球がどこにも存在していないとか、分離した後の光と闇や上と下に分かれた水は存在していても、天には存在していないという主張は成り立ちません（これらは宇宙＜天＞の**中に**存在しているとしか理解できないからです）。実際、創世記 1 章 1 節では、天も地もすでに創造されていました。この解釈は、創世記 1 章 7 節の言葉が、無から大空を「創造」したのではなく、神が何かから大空を「作った」と明記していることからも強まります。[9] それゆえに、宇宙はすでに存在していたため、この大空の形成は、再生のわざとしか解釈できません。

[9] この動詞はバラーbar'ah ではなくアサー'asah です。「創世記 2:4 の創造の概要」参照。

e. <u>再創造は、時代の流れを説明しています</u>: 創世記の空白期(ギャップ)は、聖書の七日間の記述と化石記録との間の矛盾と思えるものを最もうまく解明してくれるように思えます。創世記 1 章 1 節から神が天使を創造するまで、あるいは創造からサタンが堕落するまで、あるいは創世記 1 章 2 節の原初のエデンがあった地球に対する神の裁きから回復までの間の正確な期間は、聖書のどこにも記録されておらず、千代八千代の期間である可能性があります(結局のところ、天使の領域では感じ方や計り方が大きく異なります)。しかし、それに加えて、神が創造するとき、神は成熟した完全な状態で創造するという点もあります。六日間で創造された植物、動物、人間(アダムとエバ)は、いずれも成熟した状態で創造されており、時代背景を感じさせます。回復された「天の光」と回復された地球も、同様に完全な創造の恩恵を受けていると考えても間違いはないでしょう。この創造は、長い地質学的な歴史を感じさせるかもしれませんが、それは私たちの限られた理解に基づいているもので、実際の時間の長さからかけ離れた想定かもしれません。

> 信仰によって、わたしたちは、この世界(物質世界)が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである。(ヘブル 11 章 3 節)

> すなわち、彼らはこのことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、(再び)地は神の言によって、水がもとになり(水の下から出て)、また、水によって(二回水を通して)成ったのであるが、その時の(ノアの時代の)世界は、御言により(再び)水でおおわれて滅んでしまった。しかし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。
> (ペテロ第二 3 章 5-7 節)

f. <u>再創造は、他の神の再創造と類似しています</u>: アダムの堕落は、創世記の空白期(ギャップ)の裁き(創世記 3 章 17-19 節)に類似した(しかし、それほど壊滅的ではない)地球上の呪いをもたらしました。しかし、すべての被造物は、創世記 1 章 2 節の地球の回復と同じように、キリストの再臨でもたらされる祝福である、呪いの除去を「うめきながら」待ち望んでいます(ローマ 8 章 19-22 節)。このように、神の裁きの後に恵みの回復があることを示す例は、他にもたくさんあります。1) 大洪水の後の地球の再生(創世記 8-9 章)、2) ヨセフの牢獄からの解放と家族との関係の回復(創世記 45 章)、3) イスラエルのバビロン捕囚の後の帰郷(エズラ記 1 章)、そして 4) 最も重要で壮大な回復、すなわち、神である人、私たちの主イエス・キリストの贖いの御業による罪深い人間の神への回帰です(特にローマ 5 章 6-11 節参照)。私たちの神は、正義の裁きを行う

一方で、悔い改めて神のもとに立ち返るすべての人のために、常に慈悲深く復帰をさせて下さる恵み深い神であることは言うまでもありません。荒廃した地球の回復は、サタンとその従者たちに対して、神は和解のために何もできない、あるいは何もしてくれないという彼らの誹謗中傷が、紛れもなく間違いであることを示す明確なしるしでした（このシリーズの第 1 部参照）。

g. 再創造は、サタンとその天使たちの代わりとしての人間に焦点を当てています:
　最後に、七日間の神の働きはすべて人間に焦点を当てています。

-第一日:生命維持に必要な闇からの光。
-第二日:大気　すべての生命に必要なもの
-第三日:乾いた土地　あらゆる動物の生命と人間に必要なもの;　食料、材料、喜びなどの源としての植物
-第四日:「しるしとしての役割」を果たす光:人間の生活を必要な時間単位で秩序立てるため。
-第五日:その他の生物:人間の生活を豊かにする。
-第六日:人間の生活を支え、祝福するための陸生動物や家畜、最後に人間です。
-第七日:神の安息日:人間の祝福と利益のために設計されている。

　創世記 1 章 26-30 節では、人間の創造が神の仕事の頂点であることに注目してください。そのプロセスは、三位一体の神の会議がその決断を告げることから始まります。**「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り…」（創世記　1 章 26 節）**。そして、人は神に似せて創られ（27 節）、祝福され、地上の他のすべての生き物に対する支配を与えられ（28 節）、食べ物を与えられます（29 節、他の生き物と同様に 30 節）。人間の創造と、その肉体の生活を支える環境の整備が、神が世界を回復させる七日間の目的であり、ゴールであることは明らかです。地球が生存可能な状態に回復し、その上に人間が創造され、その管理を任されて初めて、神はお造りになったすべてのものを「**とても**良い」と結論づけられます（31 節:神が七日間の様々な行為を「良い」と評価するために使われていますが、ここでのみヘブル語のメオッド＜とても＞という言葉が付け加えられています）。七日間のパターンも、その後の人類の歴史に合ったものであり、一日は人類の歴史の一千年を意味し、七日目はキリストの千年の統治を意味します（この原理については、このシリーズの第 5 部で詳しく説明します）。また、七日間の神の回復の働きが完全に人間に集中しているという事実は、創世記 1 章 2 節が再創造のプロセスの始まりであったことを証明しています。特に神である人、イエス・キリストを通して、サタンとその堕落した天使に人間が取って代わることが少なからず意図されています。

2. 創世記 2 章 4 節の要約

創世記 2 章 4 節は伝統的に、創世記の空白期（ギャップ）や、創世記 1 章 1 節の原初の創造と再創造の七日間との間に聖書が描く正当な区別について、多くの混乱の原因となってきました。例えば、新国際訳（NIV）では次のように訳されています。

これは、天と地が創造されたときの記録である。
［二行文の間が取られている］
神である主が地と天を創られたとき、［第五節］**まだ野の低木は現れていなかった。**

上記のように訳すことで、NIV（および同様のアプローチをとる他の訳）は、英語の読者に、第四節が文法的に二つに分かれており、前半は再創造の七日間を振り返って見ており、後半はアダムとエバの創造の詳細を未来に向かって記述しているというあからさまな印象を与えます。第四節は、よく多くの人達に誤解されていますが、実際には、文法的に一かたまりの文節であり、四節全体が、それまで述べられたすべての出来事（原初の創造と回復の七日間）を振り返って**要約**していることです。句読点は重要な意味を持ち得ます。第四節は次に続く節とは注意深く明確に区別されるべきです。なぜなら、第五節から、神がアダムとエバを創造したことについて、より詳細な説明が始まるからです。これは回復の六日目に起こった出来事です（創世記 1 章 27 節）。創世記 1 章 2 節と同様に、創世記 2 章 5 節も、ヘブル語では区切りが明確にされる、逆接のワウ(waw)構文で始まります（このシリーズの **I. ＜創世記の空白期（ギャップ）を示す言語的証拠＞**参照のこと）。

地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。（創世記　2 章 5 節）

この詳細な記述の直前に、4 節の要約文が与えられています。

これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である主が、地と天を造られたときのこと。（新改訳Ⅳ　創世記2章4節）

第4節は、神が七日目に休まれた直後ということもあり、シンデトン（「そして」などの接続詞を挟まない）＜シンデトン：一連の繋がりのある節から故意に接続詞を省略する修辞技法のこと＞で説明するという古典的な方法で始まっています。理論的には、この節はその前の文を説明していることも、その後の文を説明していることもあり得ます。

しかし第五節の文脈の流れから分離した始まり方は、後者の可能性＜つまり第四節が第五節以下を説明していること＞を排除しています（なぜなら、導入文の**直**後に、第五節のような大まかな区切りがすぐに来ることはないからです）。しかし、第四節を、それまでに説明されているすべてのことの要約として捉えるなら、原初の創造**と**再創造の七日間の**両方**が含まれていることを考慮に入れて考える**なら**、意味をなしてきます。この二つの要素が第四節の要約に含まれていることを理解していないために、この節とその後の文を不自然な形で結びつけようとしたり、NIV 訳のように二つに分けようとしたりすることにつながっていくのです。

創世記 2 章 4 節で創造と再創造を要約するために使われている語彙は一貫していて、正確です。天地の「創造」と主なる神がそれらを「造られた」ことが語られています。「創造」はヘブル語の「バラー」（ברא）で、「造る（造化/形成する）」はヘブル語の「アサ」（עשה）です。バラーは、聖書の中で、主の奇跡的で創造的なみわざに対して最もよく使われます（ちなみに、創世記 1 章 1 節にある「創造された」という言葉です）。一方、アサは、「作る/造る」ことや実行することを表す最も一般的なヘブル語の言葉で、聖書の中で、神以外にも多くのものに使われます。モーセ五書の著者であるモーセが、なぜここで両方の違う動詞を使う必要があると感じたのか、その手がかりは「経緯」（toledhoth, **תולדות＜原語の意味は「世代」「歴史」＞**）という言葉にあります。この複数形は、旧約聖書では通常、人間の家族の祖先や血統を詳述するために用いられており、したがって、かなりの時間をかけて展開していくという考えを必然的に含んでいます。したがって、この「経緯」という言葉は明らかに、天と地の歴史の色々な段階の期間が「展開」してきたことを言っているものです。すなわち、1）原初の創造、2）裁きと創世記の空白期、3）再創造です。ですから、この聖句を七日間の造化を原初の創造と見なそうとするなら明らかにかみ合わなくなるのですが、「**創造**」という動詞（バラー：創世記 1 章 1 節： 原初の創造に最も適している言葉です）と「**造る（造化/形成する）**」という動詞（アサ：七日間を通して見られる。たとえば、創世記1章7節; 1 章 16 節; 1 章 25 節: これらは再構築により適している言葉です）の**二つの動詞**を創世記 2 章 4 節において述べられている展開していく「経緯」として捉えるなら、創世記 1 章 1 節の原初の創造、創世記の空白期、そして再創造の七日間という、それまでのすべての出来事を総括するものとして、完璧に意味をなしています。

これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である主が、地と天を造られたときのこと。（新改訳Ⅳ 創世記2章4節）

また、前半の「天と地」と、後半の定冠詞のない「地と天」の順序が逆転していることも重要です。後半の要約である再創造の期間においては、「地」が最初に言及され、「天」

は構築された「大空」や「天幕」に与えられた名前で、二日目になって初めて造られたものです。 創世記 1 章 1 節を原初の創造とし、創世記 1 章 2 節以降を再構築の過程と理解して初めて、創世記 2 章 4 節は意味をなします。

サタンに対する神の対応： サタンの反乱について第 1 部で見たように、悪魔は、一方では神の慈悲深い性格のために、もう一つは天使の絶対的な数のために、サタンの目論んだ（そしてその後実行した）クーデターに対して、神は彼らに裁きを下すことができないと仲間を説得しました。悪魔はこの二つにおいて間違っていました。裁きは突然やってきて、宇宙は闇に包まれ、地球は荒廃しました。しかし、彼らが驚いたことに、サタンとその従者の最終的な処分はすぐには行われませんでした。宇宙は闇に包まれ、地球全体は海に覆われたまま、相当な期間、放置されていたのです。ついに神は、地を回復されました--これは、サタンが（刑に処せられるだけではなく）、誤りが明らかにされ、取って換えられるためには重要な第一歩です。神に忠実であった天使たちは喜びに包まれましたが（ヨブ記 38 章 4-7 節）、悪霊どもは震え上がったことでしょう（ヤコブ 2 章 19 節参照）。原初のエデンを再創造し、「回復」することは、神がサタンとその天使たちを（完全な正義のうちに ）最終的に処分する手段と計画を持っているだけでなく、堕落によって失われたものを取って換える手段を持っていることの明確な証拠でした。

神は、まったく予期していなかった「新しいこと」をしようとされていたのです。人間は、天使に比べてはるかに力が劣りますが（詩篇 8 篇）、サタンが求めていたまさにそのもの、すなわち**肉体**を持った被造物であり、サタンのやり損なったクーデターの本拠地であった地球（後に再構築された）に置かれることになりました。闘争は神の条件で再開されます。神は、人類を通して、サタンの嘘を一挙に暴き、サタンに取って換わるものを用意するという、慈悲と正義を同時に実現する能力を示すことになるのです。第 3 部では、神による人間の創造、人間の堕落におけるサタンの一時的な戦術的成功、そして神の御子イエス・キリストの提供という神の究極の勝利の封印について見ていきます。アダムの堕落によって罪の中に生まれた人類は、イエス・キリストによって、神の**ために**選択をすることによって、完全に創造されていたにもかかわらず、神に**逆らい**堕落した天使達に取って換わることになったのです。

---

http://ichthys.com